

2019. 12 のブログ：「二つの文化：自然科学と人文科学」

(→ <http://www.1968start.com/M/blog/index.html#1912d>) の別紙

「二つの文化：自然科学と人文科学」

中所 武司

朝日の記事 (2019. 12. 12) :

≪ 科学振興、「人文科学」と共に 基本法の対象広げる改正案、来年国会提出へ ≫

<https://www.asahi.com/articles/DA3S14291093.html>

を読んで、学生時代の英語の授業のテキスト (2 件) で学んだキーワード

“Two Cultures”を思い出した。

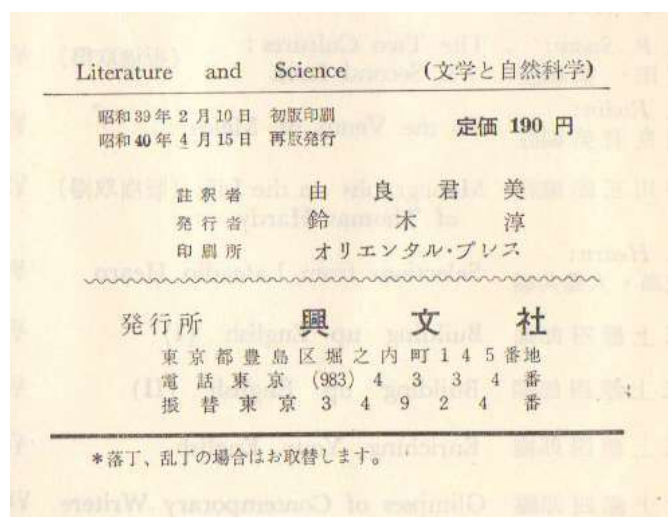
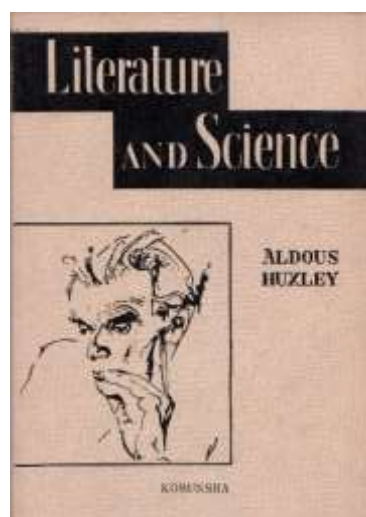
■記事の概要：

- ・現在の科学技術基本法は、「人文科学のみに係るものを除く」と規定しているが、人工知能 (A I) や生命科学などが進展し、現代社会の課題を解決していくには人文科学の研究も不可欠になっているので、この規定を削除する予定。

■50 年以上も前の大学 1, 2 年 (1965~1966) の英語の授業のテキスト 2 件

● ”Literature and Science (文学と自然科学)”

Aldous Huxley 著 興文社 (1964. 2. 10 初版、1965. 4. 15 再版 190 円)



<日本語のはしがき (注釈者：由良君美) 抜粋>

『死期を前にした 1963 年 9 月に、ハクスレーは≪二つの文化≫をめぐる大論戦に、いかにも彼らしいやり方で行司役を買ってでた』

『《**二つの文化**》の論争は、もともと、17世紀の科学革命を皮切りとして、西欧世界に提起された根深い問題であり、さらに19世紀産業革命によってその現実性を強められ、さらに現在の第2次産業革命によってさらにその緊急の解決を迫られるに至った**歴史課題**といわなければならない』

『この問題が英米において、最近とくに広範囲な関心を呼ぶ論題となったのは、《スノウ＝リーヴィス論争》によってであった。1959年5月・・・』

『スノウの講演は・・・《**二つの文化**》というキャッチフレーズを効果的に使用しながら進められた議論であっただけに、時評性が強く、綿密さを欠き、・・・』

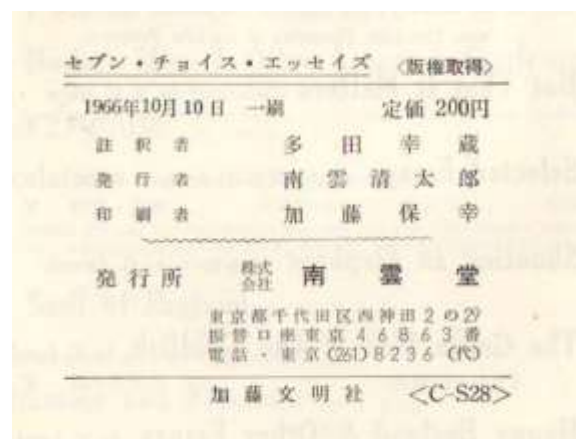
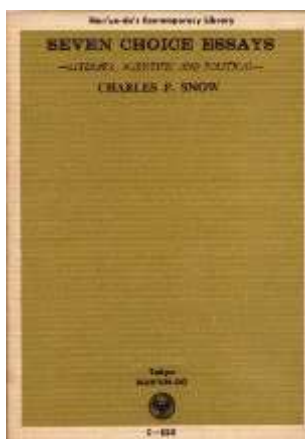
『ハクスレーは、この大問題を、口喧嘩の土俵から救いだし、《**文学**》と《**自然科学**》という人類社会にとって、いわば「車の両輪」であるべき重要な二者に、それぞれの所を得させるために、十分な紙幅を使って一書を書き上げたのであった』

『《**文学**》というものを人間の私的な経験の世界を中心とした公的・客観的な宇宙との関係づけを言語をもとにして行う営みと規定し、《**科学**》を人間の経験の中の公的な性格のものを調査し・整序し・その内容を記号的に伝達する枠組みの作製である、と規定する本質論：および《**科学**》は多元的な巨大な世界を単一体系に還元するのに反し、《**文学**》はひとつの事実・ひとつの経験のもつ独自性や世界の生まのままの多様性を生きた総体のままに捉える試みであるという措定は、今日の記号論理学・メタ言語学・比較文化学の基礎的な前提を最も分かりやすく表現したものであり、この規定によって、両輪の巧みな統制を求めようとする見地から《**文学と科学**》の論争に妥当な展望を与えた手さばきは、類書に見ない卓抜な識見と話術によってなされている』

● ”The Two Cultures”

From “Seven Choice Essays –Literary, Scientific and Political–“

Charles P. Snow 著、南雲堂 (1966.10.10 200円)



<日本語のはしがき（注釈者：多田幸蔵）抜粋>

『スノーの名を一挙に世界の知識人の耳目に親しくしたのは、本書にも収めたエッセイ **The Two Cultures (1956)** である。』

『要するに、文人はもっと科学の重要性を認識し、科学を知らねばならぬ。
科学と人文という二つの文化がばらばらなのは危険だ、
教育上の改革が必要だ、というにある。』

『スノーは人間と人間との相異、近代人の疎外感や孤独感を知らないわけではない。
しかしそれ以上に彼は人間相互を結び付ける類似性を強調する。そこから彼の作品のもつ
全体的な重々しさの底になお一種のほの明さが流れることになるのであろう。
人間の孤独、絶望の悲歌をうたうのもよい。**彼はあくまで理性と科学による人間の明日を
信じようとする。**それがスノーの基本的態度と言えそうに思う。』

【コメント】

- ★科学技術基本法の改正案は、人工知能（A I）や生命科学の発展の結果として生じる社会的課題の解決には人文科学の視点が必要ということであろう。
- ★半世紀以上前の《二つの文化》の論争は「口喧嘩」レベルだったようであるが、その後の自然科学や技術の進歩がもたらした社会的功罪について考えるとき、その時々^の社会的価値観によって、自然科学や技術の発展の方向性が決まることは避けられないと思われる。個人の価値観の多様性を尊重しつつ、方向性を決めるための社会的価値観を共有する努力は必要と思われる。

以上